

令和元年6月9日現在

機関番号：34427

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770227

研究課題名（和文）残留日本兵の社会史的研究

研究課題名（英文）The Social History of Japanese Army Stragglers

研究代表者

林 英一（Hayashi, Eiichi）

大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：20724206

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、第二次世界大戦後にアジア各地に発生した残留日本兵とその家族の戦後史を虚像と実像の両面から明らかにしたことにある。

彼らへの聞き取り調査、文献調査によって、残留日本兵とその家族の生きられた歴史を再構成することによって、上記の語りのなかに登場する「戦争犠牲者」、「英雄」といったイメージとは異なる実像を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後70余年が経過しているが、我が国における先の大戦の総括はいまだ十分になされていない。こうしたなか、敗戦と帝国の解体によって行き場を失った残留日本兵とその家族たちの小さな歴史を明らかにすることには、先の大戦、戦後日本とは何だったのかを議論していく際の視点と材料を提供するという意義があると考えられる。

帝国が折りたたまれていく過程で、その周縁を生きた彼らの歴史的経験は、人口減少によって縮小していく日本社会のなかで生きる私たちにとっての関心事であり続けるだろう。

研究成果の概要（英文）：From this research of the Japanese Imperial Army who did not return to Japan and their families, it is evident that they were considered to be neither “unfortunate” nor “heroic.”

研究分野：日本近現代史

キーワード：残留日本兵 横井庄一 小野田寛郎 中村輝夫 インドネシア ベトナム 帝国日本 戦後日本

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 戦後 70 年を機に、第二次世界大戦をめぐる日本人の歴史認識、戦争観の断絶と連続について考えたい。具体的には、第二次世界大戦を戦争の問題としてだけでなく、帝国主義、植民地主義の問題として捉え直していきたい。また、第二次世界大戦中に日本がアジア諸国に与えた「衝撃」だけでなく、アジア諸国が日本に与えた「衝撃」についても考察したい。
- (2) 残留日本兵の経験からアジアに生きる日系人の歴史と現在を理解し、将来を展望したい。具体的には、帰還移民として日本に還流する残留日本兵の末裔たちの生活史を通じて、戦後日本における多文化共生のあり方について検討したい。

2. 研究の目的

- (1) 第二次世界大戦後にアジア各地に発生した残留日本兵の実像を明らかにする
- (2) 戦後日本のなかで残留日本兵がいかに語られてきたのかを考察し、彼らがいついかなる状況で「戦争犠牲者」、「戦争の英雄」、「友好の象徴」とみられるようになったのかを明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 東南アジア残留日本兵の家族、関係者へのインタビューを中心とするフィールドワークから、「生の声」を拾う。
- (2) 公文書館、研究機関などでの文献調査によって、史資料を収集する。
- (3) 「生の声」と史資料を使って、史実の発掘と言説分析を行う。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

インドネシア、ベトナム、タイの残留日本兵家族、関係者へのインタビューを通じて、残留日本兵とその家族の実像を解明した。

戦後日本における残留日本兵をめぐる言説を分析し、高度経済成長を境とする日本人の歴史認識やアジア観の断絶と連続を考察した。

残留日本兵とその家族が、国家間の境界線上を生きる周縁者から、「戦争の英雄」、「友好の象徴」へと公的な性格を帯びるようになっていった過程の検証を通じて、複数の戦後像を提示した。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

残留日本兵の末裔たちが、自らのアイデンティティへの理解を深めるのに貢献した。

残留日本兵とその家族の戦後史を描くことによって、戦後日本とアジア諸国の国際関係を考える上での新たな視点を提示した。

近年の東アジアにおける歴史認識問題や日本国内における戦没者の慰霊、顕彰にかかわる諸問題について考える際の材料を提供した。

(3) 今後の展望

インタビュー、文献調査の過程で、これまであまり取り上げられることのなかった残留日本兵についての情報を得たが、論文の中ではそのすべてを扱うことはできなかった。今後の研究活動の際に活かしていきたい。

研究の途上で、当時の天皇皇后両陛下がベトナムを御訪問され、残留日本兵家族に面会されるという出来事があり、それを契機にベトナムで残留日本兵の家族会が設立された。こうした変化が残留日本兵像にいかなる変化を与えるのかについて、これからも観察を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

林英一、ベトナム戦争の時代を生きた台湾人日本兵—中村輝夫と荘百洋—、東アジア研究、査読あり、第64号、2016、37-50

林英一、東南アジアにおける対日協力と抵抗の諸相—インドネシア・ビルマ・インドの義勇軍の比較—、現代中国研究、査読なし、第35・36合併号、2015、15-28

〔学会発表〕(計4件)

林英一、「歴史戦」前夜—ジャカルタ日系人団体の事例研究—、京都大学東南アジア地域研究研究所・東南アジア研究の国際共同研究拠点「ミクロヒストリーから照射する越境・葛藤と共生の動態に関する比較研究」研究会、2018

林英一、日本兵がみた大戦・脱植民地化・冷戦、大阪経済法科大学アジア研究所・多文化共生社会研究会、2017

林英一、両陛下ベトナム訪問の意味を読み解く、大阪経済法科大学経法学会教養部会定例研究会、2017

林英一、戦後70年とは何か、日本学術振興会育志賞研究発表会、2015

〔図書〕(計1件)

林英一、小野田寛郎と横井庄一—豊かな社会に出現した日本兵—、杉田敦編、岩波書店、ひとびとの精神史、第6巻、2016、217-243

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）:

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。